

## 日本のポピュラーソングにおける若者の価値観

Rafal Zaborowski

### 1. 研究目的

本研究はポピュラーソングの歌詞の主題と文脈について考察しようとするものである。現代日本社会とそこに生活する人々の感情について十分な理解を導くため、人気曲の歌詞を研究することには大きな意義があるものと考えられる。特に、それら歌詞と現代日本の若者たちが持っている価値観・感覚との関連性を調べていくために、過去 10 年間におけるヒットソングの歌詞分析を行う。

ポピュラーソングの歌詞分析による消費者の価値観についての調査が現代社会理解のうえで役立つ手法の一つであるとしてこれまで多くの事例研究がなされてきたが、先行研究のある程度の蓄積にも関わらず、ポピュラーソングの歌詞という分野に関しては、これまでほとんど言及がなされてこなかったというのが現状である(Cooper 2006: 4-5)。また、これまでの日本のポピュラー音楽に関する研究分野では、日本の音楽の歌詞について研究の派生的な部分として何らかの示唆が行われることはあっても、歌詞という主題を中心軸に据えた満足のいく研究がなされてきたとは言えない。

そこで、本研究ではポピュラーソングの歌詞という主題に焦点を定め考察することで、歌詞という研究分野全体との一貫性を提示したい。更に、日本人の若者たちがポピュラーソングの歌詞から感じていること、経験したことを調査するためにフォーカスグループセッションを設定し、筆者の行った歌詞分析の結果についてより詳細な検証を試みる。最終的に、歌詞分析の結果とフォーカスグループセッションから得られた成果を比較することで、歌詞分析を通じて見出された価値観と現実の日本人の若者たちの価値観双方の関係性についての究明を試みる<sup>1</sup>。歌詞分析は、ポピュラーソングの傾向・パターン、または曲に含まれている価値観を十分に分析して代表的な曲を選び、その結果を用いてフォーカスグループセッションの質問を作成するという手順で行う。

### 2. 研究の背景

現代ポピュラー音楽が、歌詞を伴った「歌」という形式をとっていることは、多くの研究者の間で意見が一致している<sup>2</sup>。ポピュラー音楽の構成要素が現代社会をどう反映しているのかという主題に関して近年多くの研究がなされているが、特に歌詞の言語内容分析研究が中心的である。80 年代以降、聴衆に関する研究は、多くのカルチュラル・スタディーズの手法による社会分析の焦点となり、音楽が聴衆へと受容されていく過程を主題とした研究がなされた<sup>3</sup>。歌詞の内容と聴衆の反応の関係性を分析した諸研究は、聞き手側の心情やその社会的な重要性について意味深い洞察を明示し、同様の研究を日本においても行えば、ポピュラーソングにおける日本の聴衆と彼らの感情についても同様に解明することが可能であろう。過去 10 年間のポピュラーソング歌詞を分析し、聴衆の反応を含めた研究をすることで、日本の一般的な若者たちの価値観について、何らかの発見ができるはずである。

筆者は 1 ヶ月前に行った予備研究を基にこの仮説が妥当であると考え。その研究は、(1) 日本ポピュラー音楽の歌詞にある一定の価値観が存在すること、(2) これらの歌詞が西洋<sup>4</sup>のそれとは異

<sup>1</sup> フォーカスグループとは、選別した回答者を集め、グループに分けて行う研究方法である。各グループには通常 6 人から 10 人程度が集められ、1 時間から 2 時間かけて行われる。詳細は Marshall and Rossman (1999)。

<sup>2</sup> Middleton (1990: 227), Wall (2003: 123), Frith (1998), Brackett (1995)

<sup>3</sup> Freudiger and Almquist (1978), Coward (1984), Prinsky and Rosenbaum (1987), Frith (1989) Longhursts (1995) 等

<sup>4</sup> この予備研究では、ビルボードというアメリカのチャートを用いた。このチャートが及ぼす影響は、全世界的に認められているので、西洋の代表的なソースとして選んだ。

なった形式をとっているということを明らかにした<sup>5</sup>。日本とアメリカのヒット曲を比較したところ、アメリカの歌詞にあまり出てこないトピック（調和性・通常性等）が日本の曲に豊富に出てくるといいう点、また、日本の曲の歌詞に出てこないトピック（お金・肉体・立腹・非難等）がアメリカの歌詞によく出ているという点を発見した。西洋のポピュラー音楽と比較して日本の歌詞が独特なものであるなら、それらが独特な社会学的な意味合いをもっていることを仮定するのは妥当であると考えられる。その分析を通し、そこに描写されている現代日本の若者たちの価値観を理解することが可能なはずである。それがこの研究の中心的仮説であり、筆者は本研究を通じて、この仮説の検証を試みたい。

### 3．先行研究

日本のポップカルチャーについて、テレビ、映画、アニメという分野での研究が多い一方、ポップソングの歌詞の言語的・文化的意味合いに対する総括的な研究は乏しい。この分野での第一人者である、Stevens と Yano は、それぞれ、「THE ALFEE」と演歌について重要な研究をしているが（Stevens 2007、Yano 2002）、それらの範疇は特定の歌手、分野に絞られており、より広く一般性を示すものではない。同様に、Armstrong (2001)、Condry (2001)は日本のヒップホップを分析し、Occhi (2000)やOku (1998)は、演歌、歌謡曲を研究している。Pennycook (2003)は「RIP SLYME」、大山 (1999) は宇多田ヒカル、Cogan and Cogan (2006) は「少年ナイフ」、「パフィー」について、それぞれ歌詞の内容を分析している。その他、日本の曲の歌詞に表れる特定の主題やモチーフについて多くの研究がなされており、それらは特に国内の研究者たちによって行われている（赤坂 2003、疇地 2007）。また日本の曲における言語的傾向、リズム、歌詞の構造の分野についても多くの研究がなされている（松尾 1997、岸本 2005）。

残念なことに、これら全てのケーススタディは、研究そのものに限界があり、又、どれも社会領域における包括的な概観を意図していないため、より一般的な理論構造を構築することができていない。Stevens は、近年出版された J-POP についての著作において、「歌詞の中心的機能（役目）は、音と音に対する感情の関連性を促進させることだ」と述べているが（Stevens 2007:133）彼女はそれ以上そのことについて、より深くは言及せず、すぐに J-POP 曲の歌詞における英語の使用法等に分析の視点を移している。同様に、狩野 (2004) の歌曲の歌詞についての研究では、狭い範囲での社会学的なアプローチを含んでいるが、特定の伝統的歌謡曲にみられる言語文化の翻訳について言及しているにすぎない。これらは、日本のポピュラー音楽と社会、文化との関連性を研究したいと望む研究者が克服しなければならない課題を欠いている。

### 4．研究方法

研究を進める上で、オリコンチャートに載った曲を中心に扱う。予備研究と同様に過去 10 年間で毎年上位 100 位までに入っている曲をランダムに選び分析していく。より一般性のある結果を導きだすことを目的としているため、最も主流で有名なチャート・アーティストを全般的に分析することが可能だと考えられるオリコンを選んだ。10 年間という期間は、信頼性がある最新のデータを収集するために十分に広範なものである。

また、日本の若者を集めたフォーカスグループセッションを用意する。フォーカスグループは定性分析の仕方、対象全体の各セグメントが代表されるため、サンプリングのような社会学的なツールを用いた上でその対象は慎重に選ばれている。この研究のために作られた研究セッション、また、そ

<sup>5</sup> 予備研究で、日本とアメリカのヒットソングの歌詞の比較を行った。1998 年から 2007 年の 10 年間のうちランダムに 1 年を選び(2004 年)、それぞれオリコン、ビルボードという年間音楽チャートからランダムで 20 曲を選んだ。ナンバーは、random.org website（www.random.org、5 月 17 日にアクセス）からランダム整数を生成するソフトを使って分類されている。歌詞分析を行う前に、演繹的に予想した歌詞に現れる主題を 17 個選んで分類した。また、帰納的に 10 個の分類を後に増やした。そして、コーディングシートに表されている選曲された歌詞と比較した結果を分析した（別表 1）。

の参加者たちの感情的な反応を得ることによって、歌詞における形式、イメージを把握することができただけではなく、それらが広範な聴衆への影響力をもつのかどうかということを調査したい。議論を進めるにあたって、まず様々な題材に対する彼らの考え方、意見について、それぞれの好み、価値観について書いた個人表を作成することで入手する<sup>6</sup>。その上で、選択した曲の歌詞についての議論を行い、歌詞の質問に対する参加者の反応を書いた表と事前に作った個人表を比較して分析する。

本論では、特別な歌手を研究するかわりに、過去数年における人気曲について、広範・詳細に研究していく。歌詞内容が聴衆の特定の見方と関連しているとして、ポピュラー音楽と現代日本社会の双方に関係があるかどうかということを一一般化し、また現代日本社会における価値観<sup>7</sup>、感じ方の斬新かつ重要な見識を一般化することが可能であると考えられる。

## 参考文献

- 赤坂憲雄 (2003) 「唱歌のなかの「故郷」をほどく歌詞に見る屈折に満ちた精神史」『望星』第34巻 第3号
- Armstrong, A. (2001), "An Introduction to Japanese Hip hop: Re-mastering a Global Pop-culture Idiom", *Dynamis* No. 5.
- 生明俊雄 (2006) 『ポピュラー音楽は誰が作るのか：音楽産業の政治学』勁草書房
- 疇地希美 (2007) 「J-POP リズムと歌詞の入れ込みルールの変遷」『音楽教育実践ジャーナル』第5巻 第1号
- Brackett, D. (1995), *Interpreting Popular Music*, Cambridge University Press.
- Cogan, B. and Cogan, G. (2006), "Gender and Authenticity in Japanese Popular Music 1980-2000", *Popular Music & Society*, Vol.29, No.1.
- Condry, I. (2001), "Japanese Hip-Hop and the Globalization of Popular Culture", in Gmelch and Zenner (eds), *Urban Life*, IL: Waveland Press.
- Cooper, L. (2006), *Popular Music Perspectives: Ideas, Themes and Patterns in Contemporary Lyrics*, Bowling Green University Popular Press.
- Coward, R. (1984), *Female Desire: Women's Sexuality Today*, London: Paladin.
- Freudiger, P. and Almquist, E. (1978), "Male and female roles in the lyrics of three genres of contemporary music", *Sex Roles*, Vol.4, No.1.
- Frith, S. (1998), *Performing Rites: Evaluating Popular Music*, Oxford Paperbacks.
- (1989), "Why Do Songs Have Words", *Contemporary Music Review*, Vol.5, No.1.
- 狩野キャロライン・エリザベス (2004) 「An English Translation and Cultural Interpretation of the Poems of Five Representative Works of Nihon Kakyoku (Japanese Song)」『島根女子短期大学紀要』第42号
- 岸本裕一 (2005) 「J-POP ヒット曲の構図の構造的文化」岸本裕一他『芸術・芸能の社会的基盤』桃山学院大学総合研究所
- Marshall, C. and Rossman, G. (1999), *Designing Qualitative Research*, 3rd Ed., London: Sage Publications.
- 松尾浩一 (1997) 「校歌の歌詞にみられる地名等の名称について - 和歌山市内 52 小学校を例として」『和歌山地理学会誌』第17号
- Middleton, R. (1990), *Studying Popular Music*, Philadelphia: Open University Press.
- Oku, S. (1998), "Karaoke and Middle-aged and Older Women", in Mitsui and Hosogawa (eds.) *Karaoke Around the World*, Routledge.
- Occhi, D. (2000), *Namida, Sake and Love: Emotional Expression and Japanese Enka Music*, Ph.D. Dissertation, University of California-Davis.
- 大山智徳(1999) 「"Automatic"の歌詞の位相をめぐって - 恋する身体・記号論」『社会分析』第27号
- Pennycook, A. (2003), "Global Englishes, Rip Slyme and Performativity", *Journal of Sociolinguistics*, Vol. 7, No. 4.
- Prinsky, L. and Rosenbaum, J. (1987), "'Leer-ics' or Lyrics: Teenage Impressions of Rock'n'roll", *Youth and Society*, No.18.
- Stevens, C. (2007), *Japanese Popular Music: Culture, Authenticity and Power*, Routledge.
- Wall, T. (2003), *Studying Popular Music Culture*, Hodder Arnold.
- Yano, C. (2002), *Tears of Longing: Nostalgia and the Nation in Japanese Popular Song*, Cambridge: Harvard University Asia Center.

<sup>6</sup> ただし、第一に心理的な分析に焦点を当てているのではなく、むしろ、集合的なプロファイルを構築する点を強調したい。

<sup>7</sup> ポピュラーソングにおける価値観だけを研究して、若者の全価値観が明らかになるとは思われない。しかし、この研究は若者の価値観の見逃してはならない一面を示すことになるだろうと考えている。つまり、日本の若者たちの全価値観・感情的プロファイルを作るため、この研究が必要であると考えられる。

別表 1 予備研究のコーディングシート

	歌詞上で表現された回数	ヒットチャート順位 (a = Billboard, j = Oricon)		
テーマ	米	日	Billboard Top 100	Oricon Top 100
心理的・社会的問題	2	0	a47 a98	
政治意見	2	0	a47 a62	
恋・片思い・不幸な恋愛	1	4	a28	40 47 58 74
幸福な恋愛(男/女)	0	4		12 40 65 86
別れ(距離的)	0	8		28 32 47 53 58 74 81 88
浮気	4	0	a12 a30 a40 a53	
非難・憤慨	6	0	a28 a30 a40 a53 a62 a93	
別れ、決別(恋人同士)	4	1	a28 a30 a40 a93	53
他人への典型的な応援、励まし(がんばれ)	1	5	a81	28 32 49 87 89
自己への応援、励まし(がんばる)	1	5	a74	32 41 53 74 81
感謝	0	3		81 86 89
家族	0	2		80 89
性交・欲望	7	2	a32 a41 a49 a58 a85 a86 a87	40 83
軟派	4	1	a32 a65 a86 a87	83?
酒・麻薬	3	0	a86 a87 a98	
お金	6	0	a47 a49 a62 a65 a86 a87	
日常性(物・行為・表現)	0	7		49, 69, 112, 174, 81, 88, 82
人種問題	3	0	a47 a62 a65	
謝罪	2	0	a12 a30	
体・肉体	4	4	a41 a49 a86 a87	40 62 85 83
思い出	1	5	a74	12 28 47 58 89
死・老(亡)・末期疾患	1	2	a81	80 88
休憩・癒し・ホリデー	1	3	a89	12 49 83
不幸・悲しみ(非難なし)	0	2		80 83
友情	0	1		82
無常(桜等)	0	3		82 49 85
初恋	0	2		47 89
deductive reasoning (演繹)				
inductive reasoning (帰納)				